

在日ブラジル人児童・生徒の 日本における教育参加過程

石塚昌保
堀之内テレーザ文子

● ブラジル人児童・生徒への教育の現状

井上 それでは早速、第1部の現地報告をお願いしたいと思います。先ほど申しましたように「企業・自治体・NPOによる取り組み先行事例」を報告する予定の田村太郎本センターフェローは欠席していますので、資料配布（資料p.112参照）ということをご了承いたします。

「在日ブラジル人児童・生徒の日本における教育参加過程」ということで、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターフェローの石塚昌保さんと、それから上田市で外国人相談員をされています堀之内テレーザ文子さんのお2人にお話しいただきます。

石塚昌保 在日ブラジル人児童・生徒の日本における教育参加過程、上田市におけるインタビュー調査（資料p.123～125参照）を中心にということで、私、石塚と堀之内テレーザ文子さんが報告します。

まず、問題意識ですけれども、在日ブラジル人児童・生徒を取り巻く現状として、出稼ぎで来日している親世代が今後日本に基盤を置いて生活していくのかどうかということ、日本かブラジルか、永住か帰国かということ非常に揺れ動いている状況があります。それに伴って、子どもの状況も日本かブラジルか、永住か帰国かということで一貫した教育を受けることがすごく難しい状況になっているというのが問題としてあります。それらの問題に対して、少しでもスムーズに日本の教育に参加できるような仕組みはないのかということ、それを検討したいと考えております。

目的と方法についてお話しします。仕組みづくりとか課題を浮き彫りにして、それに対する取り組みをするためには、まずはどのような問題が生じているのか

を明らかにすべきということで、調査の目的としては、上田市に住む在日ブラジル人児童・生徒が市の教育を受ける、または市で生活をする際に実際どんな問題が生じているのかということ明らかにすることに絞りました。方法については、半構造化面接（あらかじめ質問項目は用意しておくが、その中で自由に話を聞くスタイル）のインタビュー調査を行いました。対象は、市在住の在日ブラジル人家族で、今日お話しいただく堀之内さんや後で出てきますが「虹のかけはし」という教室の指導員の先生にご紹介していただきました。インタビューのやり方としては親御さんとお子さんを同時に、いろいろな質問をさせていただくという形式を取っております。



石塚昌保

インタビュー調査を行うに当たって、調査目的が記入してある同意書にサインをいただき、個人が特定されない、調査目的以外でデータを使用しないということをご了解をいただきました。調査期間は、07年8月下旬から9月の下旬です。通訳は、上田市の方に協力していただいたのと、当研究班に日系ブラジル人のウラノ・エジソンさんがいますので、面接者兼通訳でやっていただきました。質問項目は8項目、保護者用と子ども用に分けて一応考えましたが、インタビュー調査の中で混ざって聞いてしまった部分がありますが、この8項目を念頭に置いてインタビュー調査を行ったとご理解いただければと思っています（表1参照）。

その結果ですけれども、実はまだ分析が途中でして、15組中6組分ぐらいの分析しかできておりません。分析の仕方自体をいろいろ検討しなくてはいけない部分がありまして、今回は途中経過という形でご報告させていただきます。

まず移住の経緯ですが、やはり経済的な理由とか親族が先に日本に住んでいるとか、あとは日本への親和性の高さなどから移住に至ることが多いということでした（表2参照）。日本での生活に関して良かった点、困った点については、日本に対する印象として意外と教育の質が良いという意見が多かったです。教育に関し、何か困ったことがある半面サポート源もあ

表1

質問事項
<p>〈保護者用〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 移住の経緯 ② 日本での良かった・困った経験について ③ 最近の子どもの様子で気になること ④ 子どもたちの教育について何か気になること ⑤ 日本での仕事について
<p>〈子ども用〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 学校での良かった・困った経験について ② 学校内でのサポート源について ③ 将来の夢などについて

表2

結果 (分析中) (保護者+子ども)
① 移住の経緯
☆ 経済的な理由 「お金を稼ぐために来た」「経済的な理由で」
☆ 親族が先に日本に住んでいる 「上田には姉がいた」「主人が10ヶ月ほど先に日本に来ていて、それで」「家族が日本にいたから」
☆ 日本への親和性の高さ 「日本についてもっと知りたい」「日本語という言葉を憶えたいという気持ちがあった」

表3

結果 (分析中) (保護者+子ども)
② 日本の生活で良かった・困った経験について
〈良かった経験〉
☆ 教育の質が良い 「中学校までは同じ水準の教育を受けられる」「日本の教育の方がよい」「日本の学校に行っていて、いろいろな活動があり、参加していて、子どもにとって良い」
☆ サポート源がある 「姪っ子がいてわからないことは通訳してくれる」「市役所に行けばわからないことを教えてもらえる」「近所の人が手助けしてくれる」こころの相談室など

表4

結果 (分析中) (保護者+子ども)
〈困った経験〉
☆ 日本での生活をする上での困難さ 「漢字が大変だった」「言葉ができなくて大変だった」「食べ物に慣れていない」「日本の学校の習慣や規則に従いたくない・理解できない」
☆ 子どもの将来の見通しが不透明 「日本の学校に入れてどのような将来になるのかわからなかった」
☆ 子どもとの接触時間の少なさ 「帰ってくるまで1時間ほど子どもが一人」「子ども達と一緒に過ごす時間がない」

る、支援してくれる人がいるということが分かりました(表3参照)。逆に困った経験としては、日本の生活全般に対する困難さ。これは特に言語が主になっていますが、お子さんは学校で漢字とか国語の勉強がすごく大変になってくる。あとは、日本語を習得するのが大変になってくる。プラス、日本で食事の問題や学校での習慣や規則などという問題も出ています。さらに、子どもの将来の見通しが不透明ということで、日本の学校に今は入れているけれども、この先高校、大学となったときに、就職はどうなるのかという将来見通しが不透明ということが挙げられています。また、子どもとの接触時間の少なさを挙げる親御さんが意外と多くて、朝早くから夜遅くまで働いている共働きでは、子どもが夜1人になる時間が多くて一緒に過ごす時間がないという話もありました(表4参照)。

保護者から見た子どもの様子で気になることというのは、大きく分けると3点ありました。ひとつは、子どもが置かれている社会的状況ということで、これは実際今、行っているとか、これからやるという問題ではなくて、こういう状況になってしまうのではないかと非常に不安だということをお話されていました。それから将来の見通しは、少し重複する部分があるんですけども、子ども自身はブラジルに帰りたくないとか大学に行きた

と思っていますが、親御さん自身は将来どうするかは今は何とも言えないとか、子どもの意見を大事にして、まずは日本で教育を終えてからどうしようか考えるというような話もありました（表5参照）。今後の子どもたちの教育についてということで、先ほどもお話ししましたが、日本で教育を終えたいと考えている親御さんが非常に多かったというのが印象的です。ここら辺がきくと言語とか生活以外の部分になってくるんだと思うんですけども、文化伝達の葛藤ということで、ブラジル人の考えをもっと伝えたいけど、子どもたちは日本の生活の中で生きているから教えてよいのかどうか非常に迷うと。聞いていてもこっちも非常に悩んでしまうようなことが話されていました。現状としては仕事に関すること、サービス連携とか親御さん自身の将来の見通しということが挙げられていました。

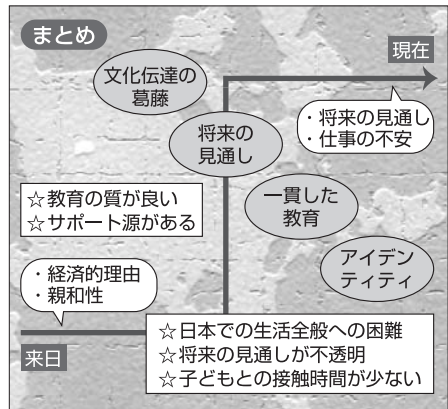
これをまとめると、来日してから現在に至るまで、教育の質が良い、サポート源があるといういい面もあるんだけど、やはり日本での生活全般への困難、特に言語、将来の見通し、これはお子さんもそうだし親御さん自身もそうだし、ここが不透明であると。子どもとの接触時間が少なくなってしまうということが経験として挙げられていました。そこから考えられる問題としては、文化伝達の葛藤や将来の見通し、一貫した教育、アイデンティティーの確立などという問題が非常に混在しているということがインタビュー調査から見てきたことだと思っています（表6参照）。

このインタビュー調査から見てきたことでもあります。現場でこうした問題も含めて子どもたちの支援を通じてさまざまな経験を豊富にお持ちの上田市外国人相談員の堀之内さんから、現状などをお話ししていただきます。

表5

結果（分析中）（保護者+子ども）
③最近の子どもの様子で気になること ☆子どもが置かれている社会的状況 「いじめられる」「麻薬の問題」暴走族「宗教的アイデンティティを失っている」 ☆将来の見通しについて 「子どもはブラジルには帰りたくない」「ブラジルには遊びでは行きたいと思うが子ども達の教育は日本で終えたい」「子どもは大学に行きたいと思っている」 ☆アイデンティティ

表6





堀之内テレザ文子

●「虹のかけはし」ができるまで

堀之内テレザ文子 11年前、私が日本に来た当時、上田市の外国籍市民は現在の3分の1でした。子どもたちを日本の学校へ通わせるには日本人の保証人が必要でした。私たち外国人にとっては、誰も知らない町でどのようにどの方に保証人になってくださいと頼めることができるのでしょうか。私たちは運良くお世話になっていた会社の社長さんが、「子どもたちは学校へ行かなければいけない」と心配してくださり保証人になってくれました。そのころは、日本人の場合も保証人が必要だと私は思っていました。でも、中学校へ入学

するときにある方へお願いすると、それはおかしいと言われました。何のための保証人ですかと聞かれたのですが、快く保証人になってくれました。でも、今ももうこのようなことはありません。

上田の外国籍市民は年々増加している中、小中学校の年齢の子どもも増えているにもかかわらず、日本語学校に通っていた児童はとても少なかったのです。6年前にブラジル人学校が隣の東御市にできましたが、その学校は親が2~3年で帰国する予定の子どもたちには非常によいところでした。でも、親には安定した仕事もなく、親の収入がバロメーターであり、5万~6万円のブラジル人学校の月謝を払うことは厳しくなるばかりでした。そこで子どもたちを日本の学校へ行かせたいという家庭が多くなってきました。

日本語を「読み・書き・話す」ことができない子どもたちを、特に小学校高学年の子どもたちを受け入れる学校は大変でした。子どもたちも日本の学校に慣れることなく、親も仕事を休めないため参観日などの子どもたちの行事に参加できず、学校からの連絡も読めず、学校側からは子どものことに対して親はどう思っているんですかとよく聞かれていました。そのような状況が続くと、子どもは学校へ行くことが苦しくなり、家で1人でテレビやゲームで遊ぶしかありませんでした。ブラジル人学校へ戻る子どもたちもいましたが、計画通りに帰国できない家庭は、ブラジル人学校から日本の高校、大学へ行くことは到底無理です。日本語は外国語として週1、2回程度教えられるだけなので、普通の会話ができる程度ですから。

市内各地の公立学校の外国籍児童が次第に増えていく中で、言葉の違いや習慣の違いによってさまざまな困難が出てきました。県や市から、1週間程度指導員を派遣し日本語を指導する支援がありましたが、外国籍児童がいる市内全校には

そのような派遣は無理でした。市で外国籍児童の支援を行って困っていたボランティアの方々から、日本語教室をセンター方式にして外国籍児童の指導をしていく必要があるという要望が出てきました。市民ボランティアや市民で構成されている提言団体「うえだ百勇士委員会」などが、何度も集中日本語教室の必要性を訴え、また外国籍市民支援会議という行政、企業、ボランティアが参加する組織ができ、外国籍児童を支援する動きが現れてきました。そして長野県と上田市が協力し、「虹のかけはし」が開設されました。

全校に日本語教室を配置しなくても、子どもに一定期間日本語、日本の学校の習慣を支援できるセンター的な場所ができました。「虹のかけはし」が開設されたために未就学児童を少なくすることができ、来日して間もない子どもに日本語、日本の学校の習慣を学べる場ができました。ブラジルの学校はいろいろな国の人、白人、黒人、日本人、中国人、ドイツ人の子どもが、さまざまな髪の色、肌の色そしてカルチャーを持ち寄って、差別なく一緒に勉強しています。ピアスは生まれたときから身に着けているもので、マニキュア、髪を染めることも、指輪・ネックレスなどおしゃれして学校へ行っています。日本へ来ると、突然、言葉も分からない中で一日中学校にいて、お掃除もする、給食も食べなくてはいけない、毎日が子どもたちにとっては「大変」という言葉だけでは終わらないことだと思います。「虹のかけはし」では、子どもたちは一定期間、基礎的な日本語と生活習慣を学習しながら、バイリンガル教員を通して安心して学校の楽しさ、お掃除、給食当番および学校のマナーを身につけて各クラスへ入ります。

親の一番の心配ははじめなのですが、「虹のかけはし」だと安心して学校へ行かせられます。親も母語で学校の仕組み、給食費、修学旅行の積立金、参観日、音楽会、運動会といろいろな行事の説明を受け参加できます。親が子どもの在籍している学校へ行くことは、学校、児童、親にも大切な一歩だと思います。参観日、音楽会、運動会へ参加できない親も何人かいます。派遣会社を通して働いているので、有休もなく休ませてもらえない状況が多いのです。親たちがもっと子どもたちの学校の行事に参加できるためにも、会社への呼び掛けも大切だと思います。

● さまざまな国の子どもを受け入れる体制を

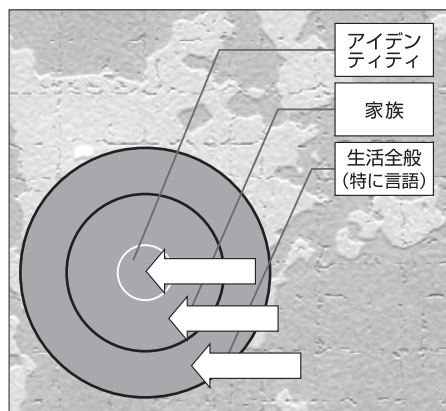
「虹のかけはし」は、学校またはクラスの先生にとってはある程度の学校の習慣、平仮名、片仮名の読み書きを覚えてクラスへ入っていってくれるので助かると思いますが、子どもがその後自分のクラスに戻ってスムーズになじんでいけ

るかどうかを考えると、「虹のかけはし」にいる間、その子とクラスの関係をつくってあげることが重要だと思います。小学校1年生なら、日本語が分からない子でも直接クラスに入りいろいろな経験をして友達をつくりながら頑張った方が、日本語を早く覚えることができます。もちろん、日本語教室での個人指導は必要だと思います。中学生も、6カ月間「虹のかけはし」にいるよりも、平仮名、片仮名と学校の仕組み、マナーが分かれば、小学生と一緒に勉強するよりも一刻も早く中学校へ行き、日本語教室で学んで早く学力を身につけることが大事だと思います。

小学校にしても中学校にしても、「虹のかけはし」を卒業してからもしっかりと日本語教室で進学への将来の夢の実現に向けられる教科指導を受けられる体制が必要だと思います。子どもの個人差はありますが、受け入れるクラスの担任の指導の仕方でも大きく変わります。外国籍児童を専門に教える教員資格がある人が必要になってくると思います。現在はポルトガル語の分かるバイリンガルの教員しかいません。いろいろな国の子どもたちを受け入れることができるよう、これから考えていくべきことだと思います。

「虹のかけはし」に通った子どもたちが、その後どのような学校生活を送っているのかを把握する必要があると思います。今までの経過とハッキリした指導の仕方、これからの方針を決めながら、バイリンガルの指導員、日本語教室と「虹のかけはし」は別々に考えず、同じ目的を持って進歩するにはしっかりとコーディネーターが必要だと思います。

石塚 今のお話を簡単にまとめたのがこの図です（下図参照）。今、在日ブラジ



ル人児童・生徒を取り巻く問題となっている部分というのは、大外の枠のところには生活全般、特に言語の問題が非常に大きいということと、内側の枠にはやはり家族の問題があって、中心にアイデンティティーの問題があるのかと考えています。特に一番外の言語のこの壁を突き破るといふか、この問題を解決するというのが非常に大変な様子というのがインタビューの中でも語られていて、いかにここを越えるか。また、



越えて終わりじゃなくて、越えた先にもやはり家族としてどこに住むのかとかどういいう教育を行っていくのかという家族の問題もあって、その先にはやはりその子どもたちが将来どうなるのかというアイデンティティーの問題というのが非常に大きいのかなと思います。アイデンティティーのことについて、堀之内さんの方からもう少しお話をいただきます。

堀之内 今、日本で生まれているブラジル人の子どもたちは、日本では当然外国人扱いされていますが、やはり子どもたちにとっては日本の学校へ小さいときから通って日本語だけを習得して、親とはあまりコミュニケーションを取る機会がなくて、日本語の方をどんどん覚えていく子どもたちが多くなってきています。それで、その子どもたちが、いま日本語を一生懸命勉強すれば、将来親たちとは違ったもっとよい仕事ができるというふうに考えて、夢を持っている子どもたちが多いです。その子どもたちが外国籍市民として扱われるか、または将来日本人と同じように日本語が分かるからよいところで仕事ができるかということも、これから考えていかなければいけないと思います。

石塚 今回は、いま上田市の在住外国人、特にブラジル人を中心にどんなことが起きているのかということをお報告させていただきましたが、やはりこの先にはそれぞれのこの三重の枠に対して誰がどういう形でかわるのかという、ハード面、ソフト面も含めて検討していくことが必要で、会場の皆様のご意見もうかがいながら考えていきたいと思っております。